



その答えは、約850社以上。
各電力小売事業者が販売するエネルギーは、再生可能エネルギー、火力、原子力などの組み合わせによって成り立ち、その配分や方針には、それぞれの会社の社会へのメッセージが込められています。

私たちは、毎日使うエネルギーについて、どれほど知っているでしょうか？

鹿島さんは
「利用者がエネルギーの中身に
もっと関心を持ち、選択する。
一人一人の行動が
やがて大きな変化につながる」と語ります。

エネルギーを通して社会に何を伝えたいのか、
鹿島さんに伺いました。

山梨県、富士山の麓に拠点を構えるつるエネルギー。
2021年に創業したこのエネルギー会社の代表、
鹿島さんが投げかけた最初の問いは、
「日本には小売電気事業者がいくつあるのでしょうか？」
というものでした。



最後に。これからお伝えすることは、これまで様々な方がくださったアドバイスが、私たちを通してブレンドされ、再編集された、新たな事に挑戦する上で大切な指針となる仮説です。今回の講座の「あなたの未来の種や想いの芽を育てませんか」のヒントになるかもしれません。

**はじめにあるのは
ピュアな探究心**

根本にあるのは何よりもまず、ピュアな探究心です。何かを知りたい、理解したいという純粋な欲求は、大人になると薄れがちです。子どもの頃に持っていた「知りたい」と純粹に求める探究心こそが、「きっかけ」と考えています。

過去は変えられる

ある人は「過去は変えられない」と言います。私たちは「過去は確実に変えられる」と思っています。例えば、事業の中でトラブルに見舞われることがあります。ですが、それを今の自分がどう受け止めるかで過去に起きたことの意味が変わるからです。SNSやメディア情報が溢れる現代、自分の力で、過去を意味あるものへと変えるためには「みずみずしい感性」つまり、自分の心の声や、周囲の声を聞き取る姿勢が必要です。今を大切に声を聞くことのできる、この感性を育

むことは、信頼できる人や大切なものを「見つけ出す力」にも繋がります。

ストーリーを描くように

私たちは事業を現実に構築していく力を「作家性」と表現します。事業もひとつの物語のように、誰が主人公で、どんなシナリオで進むのかを描いてみてください。そして「なぜこの活動が必要なのか」社会の風を感じ、社会と結びつけて考えることで、共感を呼ぶストーリー（事業）が生まれます。こうしてストーリーを描いたら、あとは自分の「覚悟」を持って、エネルギーを注ぎ実行するだけです。

祈り、託す、という心のゆとり

私たちが自分の意志で変えられることは限られています。自然災害や環境の変化など、世の中にはどうあがいても従わざる負えないこともあります。そんなとき、最後に重んじるのが「祈り、託す」という姿勢。自分の力でどうしようもできない時は、過去を悔やむよりも、導きだなど、あるがままを受け入れています。

環境問題を語るとき、「もう自分たちには未来がない」とマイナス感情が湧くこともあります。それは悪いことではありません。マイナス感情が強くなるのは、その裏に「世界を良くしたい」「未来を守りたい」という強いプラス感情があるからです。プラスの裏にはマイナスが、マイナスの裏にはプラスが常にある。どちらの感情も行動のエネルギーになると考えてみてはいかがでしょうか。ぜひ、皆さんの一歩を私たちも見てみたいと思います。

インタビュー感想

エネルギーを単に売るだけでなく、人と人、人と社会をつなぎ、地域と人に活気（エネルギー）を生み出す鹿島さんの姿勢から、つるエネルギーの根底に流れる思いが伝わってきます。地域の未来、そして地球の未来を見据えながら、今日もエネルギー事業を行うその姿勢が印象的です。鹿島さんから紡ぎだされる言葉から私たちの生き方や考え方を、見つめ直す原動力をいただきました。

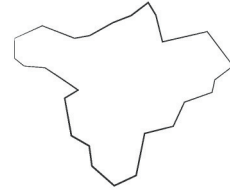
未来の環境を創る次世代のための講座
第1回『でんきのむこうに人がいる？
感じたことありますか』
株式会社つるエネルギー代表 鹿島健さん
制作 まりもりWEB制作
制作・発行 公益財団法人
キープ協会 山梨県地球温暖化
防止活動推進センター



つるエネルギーが事業を展開する場所は”地域“

まずは都留・郡内エリア、
そしてもっと広がりがあるそうです。

鹿島さんが描く”これからの地域“とは、
どのようなものなのでしょうか。



物理的な距離を超えた

いいねー、から始まる

開かれた地域

地域とは？

”地域“という言葉から、皆さんは何を思い浮かべますか？広辞苑によれば「地域とは、土地の区域」と定義されています。この定義は、車もビデオ通話もなかった時代、隣近所や村同士での繋がりが、物理的に近い距離で顔を合わせて信頼関係を自然と築くことで成立していたコミュニケーションを指します。このような直接的な繋がりのある地域は、今でも大切に守りたいものです。

しかし、科学技術が発達し、離れた場所でも、多様な人と繋がるのが出来る現在では物理的な距離だけでは「地域」を語れない時代になったと考えています。そのため、物理的な距離ではないもので、地域を再定義しています。

つるエネが再定義する地域

つるエネルギーでは「こんな明日を創りたい」と思いを掲げたとき、その思いに共鳴・共感してくれる人たちとの関係こそが、新しい”地域“だと考えています。つるエネルギーと契約をしている企業の中には、群馬や東京など遠方に拠点を構える方もいます。距離は離れていても話し合いを重ねる中で目指す未来を共有し、共に歩む関係性が生まれてきました。これまでの「開かれた地域」から「開かれた地域」に、私たちが変えていく役割を担っていると考えています。

地域にとって、
いいエネルギーとは？

いいエネルギーとは、ただ再生可能エネルギーを推進するだけでなく、社会のあり方を考えるきっかけをも提供するものだと考えています。相手の顔を思い浮かべながら、どのようなエネルギーが最善かを常に模索し続けています。



エネルギーを提供している
(左上) 群馬県長野原町 北軽井沢スウィートグラス
(右下) 東京都国分寺市 クルミドコーヒー

”つる電力“ではなく
”つるエネルギー“

社名を”つる電力“ではなく”つるエネルギー“にしたのは理由があります。電力としてのエネルギーだけでなく、人の心を動かし行動を起こすエネルギーや、教育・シンクタンクなど、エネルギーを広く深く表現していきたいと考えています。学生とのチャレンジもその一つでした。

地元大学生たちとの挑戦

ある日、都留文科大学の学生から一本の電話が。「エネルギー会社が地元にあることを知りました。都留の町で僕たちと何か一緒にできませんか？」という内容でした。そこで学生さんたちとプロジェクトを考え、チームビルディングを行い、地元企業と環境活動について話し合いの場を持つ段取りをつくりました。学生たちは、まっすぐに社会の問題点を指摘する中で、ビジネスを生業とする企業側と鋭く意見がぶつかります。今、私達はどのような行動ができて、何を実現したいのか。何度もチームで確認し合います。

がら進める中で、学生たちはアンケート調査を実施することになりました。数多くの地元の声を集めるために奔走しました。アンケートの結果は、彼らの起こしたい変化を後押しするものでした。この声を受けて再度、企業側に意見を届ける場を生み出すことに成功しました。彼らの熱量(エネルギー)が、実際の社会の変化として伝わった瞬間です。学生たちが就職活動をした後に、「非常に貴重な経験となり、自分自身の成長に繋がりました」という連絡をくれたのが存外の喜びです。

未来を動かすエネルギー

「自分たちで社会を変えられるんだ」という経験は、わくわくドキドキ感を生み出し、それはまさに未来を生み出すエネルギーとなります。このような社会を変えるエネルギーの芽を増やしていくことも、総合「エネルギー事業体」を唱う私たち「つるエネルギー」の存在意義だと考えています。私たちは、日々プロとして世界情勢や社会を分析し、人に対する認知を深め、本当の意味での繋がりを生み出す事業姿勢に磨きをかけています。電気契約を変える行動というのは、それだけ深い意味を持つと私たちは考えているからです。こうしたつるエネのメソッドを活用して、社会のエネルギーを生み出す活動に、今後も積極的に関わっていきます。



地域や日本の未来に対して

「やっぱり、どうやって

変えられないじゃん」という

歯痒さを、変えていきたい。

